

パネル・ディスカッション

指定討論者 石飛 厚志

パネリスト 吉川 徹・石田龍之介・片岡 佳美・石飛 憲

○田中

ここからは、パネル・ディスカッションです。

まず、指定討論者としておいでいただいた島根県雲南市の石飛厚志市長よりコメントをいただきたいと存じます。石飛市長は雲南市の御出身で、松江南高等学校を卒業後に早稲田大学へと進学され、大学卒業後は長年にわたり島根県の職員をお勤めになりまして、2021年から雲南市長を務めていらっしゃいます。

今日は、感染症への対応をはじめ大変お忙しい中、時間をつくって会場へ駆けつけてくださいました。

では、石飛市長、よろしく申し上げます。

○石飛厚志（雲南市長）



御紹介いただきました、雲南市長をしております石飛でございます。先ほど紹介もありましたとおり、私、雲南市の掛合町の生まれでございます。中学校卒業後ふるさとを離れて松江南高等学校へと進学し、今日、隣にいらっしゃいます吉川さんと同じクラスで机を並べさせていただいた、そういった御縁もあって、今回声をかけていただいたと思っております。

当時、私も大変変わり者だったと思うのですが、吉川さんのほうも、「この人は流されない人だな」と当時から思っておりまして、そういう中で今の成果を上げていらっしゃるものと、本当に敬服する次第でございます。

当時の学校、特に松江南校というのは進学校でありまして、吉川さんが言われるシステム、つまり、学校の中で認められた価値観、進学をするんだ、いい学校へ行くんだ、そういう形で先生方に認められるためにやったというのは、私たちが本当に実感をするところでございます。そうした価値観というものが、今も若干教育現場に残っているのかなと思っておりますが、この価値観というものが一体どうしてつくられたのか。高度経済成長下の中における日本の経済を進めていくために、地方で優秀な人材をつくり、それを集めて、発展していくという基本的な考え方の中で、メディア、特にテレビの中において、都会ってというものはい

いものですよ、先進的ですよ、様々な可能性にあふれていますよ、そういう誘引、押しつけられた価値観の中でこの時代というのが進んできたのではないかなというふうを感じているところです。

そうした中で、今は、先ほど吉川さんがおっしゃったように価値観が多様化してきている。経済成長から安定へ、そして、成功から豊かさへ。私はこの価値観の転換というのは、経済的な豊かさから心の豊かさへ、そういったものを求めていく方向へと転換をしていくものと考えております。心の豊かさというものの究極なところが人生の成功、人生というものに対しての思いというものが以前からは変わってきたのかなというふうに思っております。ただ、これがまた今はまだメジャーになっていない、なぜか。やはり、先ほど言った価値をつくっている存在というものは、もちろん地域であり家族でもあるのですが、情報発信力のあるマスメディア、そういった部分での価値観の多様化というものが、いまだに表れていない。普段、地域で頑張ってる方々のそれぞれの人生というものはなかなか取り上げにくいところではあるのですが、そういったところにこそ価値があるんだというような情報発信というものを、今後どうしていくかというのが非常に大きな課題かなというふうに思っております。

雲南市で今、市としてのこれは政策という形になるのですが、やはりこの経済的豊かさで都会と戦っても勝てない。勝つ人もいますよ、もちろん。雲南市の中でも勝てる方はいらっしゃるんですが、それは全体のボリュームの中で勝負する話ではない。やはり、全体のボリュームとして勝負をするのであれば、この雲南市というものの価値、あるいはそこで暮らす人生の価値というものをアピールしていくということが必要というふうに私は考えているところです。その中では、雲南プライドという言葉を使ったり、特産品という言い方をしたり、場合によっては観光事業を推進することでよさを再発見してもらったり、そういうこともあります。

また、仕事ではない分野、特にスポーツとか、あるいは文化活動。雲南市でいいますと神楽なんていうのもそういう部分があります。こうした、仕事ではない人生の中の目的というものを経済的価値で測れない分野に持っていく、そういったことが一つ重要なかなというふうに思っております。

また、先ほど、石飛憲さんが、横田高校でもやっていたらいますが、このキャリア教育というものに対して充実を図ろうということで支援しております。これは何かといいますと、学校の中での自己実現というのは、先ほどのお話のとおり、成績がよくなるとなかなか難しい。だけど、地域に出れば成績など関係ないんですね。その人のやる気、思い、そういったところで地域はその人を認めてくれるんです。そういった意味で、自己実現の一つ

の手法としてこのキャリア教育というもの、地域を通じて自分の存在、自分の価値というものを高めていく、認めてもらう、そういったことが可能だよということを知ってもらうという意味では、非常に有効な事柄ではないかなというふうに思っております。

要するに人生のリスペクト、価値を決めていく上で、地域社会主導での公共圏への帰属意識というものを高めることによって、個人の存在、自己実現、存在意義というものの認識につなげる、これが一つの手法ではないかなというふうに思っているところでございます。

続いて、石田さんの発表をお聞きして、少し申し上げたいところがございます。まず、私の感覚として、エッセンシャルワーカーの話と、地元大学への進学の話というのは、何となく実感として理解しにくいところかなというふうに思っております。

受皿と若者収容力という言葉をお使いになったんですけども、実は雲南市でも、特に製造業を中心にはですが企業誘致を図り、若者の働く場所というものは比較的確保している。でも、一方で若者が就きたい職場とのミスマッチというものは当然発生しているというふうに認識しております。これで、ここがまた難しいところなのですが、この島根県、特に中山間地域において、その地域の中で確保できる職種っていうものは、どう頑張っても東京や大阪、そういった都市部の職種、職の種類と同じものを用意することは、これは不可能だと思っております。したがって、ここの受皿を拡大、就職先あるいは働き場の確保っていうのは間違いなく大事なことなのですが、その職種を増やしてその若者を誘導する、これは恐らく政策としてはちょっと難しい。大学に行かないとできない職って、割と、実は限られてまして、そういった、大学の先生、あるいはお医者さん、薬剤師さん、そういう形でなろうとする方は、これはもう仕方がない。そういう方は市外に出ていくしかない。

ただ、一方で、よくあるのは、例えば建築士を目指して都会の大学には行ったものの、建築士としての働き場のキャパシティーっていうのは都会でもそんなに大きくはない。結果として何をしてると言えば、スーパーの営業の企画をやってる。これは、実は、最後の石飛憲さんの御発表と同じことなんですけれども、そもそも大学に行くというのは何のためにしているのか。夢を拡大するため、あるいは、様々な職に就くため。もちろん、これは正しいと思っております。そういった希望を中心に行っていく、ある意味、都会を目指していく。これも一つの人生の歩き方だと思っております。ただ、実は皆さん光しか説明してないんですね。学校の先生もしかりです。夢はあるよ、希望はあるよ、それで行ってみたいらどう？行ってみて、実際にはそこから、その夢は実現しないという現実があって、その現実にあたった方はどういう生活をしているのか。そのリスクと、地域の中でこういう歩き方をしていくということに対するリスクと、そこまで十分に説明を聞いた上で、それこそ覚悟を持っ

て都会に出ているのか、ここが僕はすごく重要な部分ではないのかなと思っております。

大学に行く、行った上で、本当に大学にそこまで行って勉強をしないと就けない職に就いた方ってのが一体何割ですか。何%ですか。じゃあ、それ以外の方はどんな人生を歩んでいますか。そこまでしっかりとフォローした上で、進路とか、そういうものを考えてもらうようになればいいかなと思っています。あるいは、教育等の中で、やはり理想も大事ですけども、現実というものも十分に知ってもらう必要があるのではないかな、と思ってます。

正直、都会、地方と比較して考えたとき、失敗のリスクに対する許容力というのは、地方のほうが大きいように僕は思っております。自己実現を図るという趣旨でいいますと、都会でもし失敗したら、誰も支援者・自分を理解してくれる人がいない中で、仕事をして家に帰って寝るとい生活しか選択肢がなくなる可能性が高いのではないのでしょうか。

一方で、地方であれば自分のことを周りの人は知っているという人間関係の中で、自分というものの存在場所、居場所っていうものを見つけやすい。そういう意味でリスクが低いというような言い方をさせていただきました。

そして、片岡先生の御発表は、保護者に焦点を当てられた発表で、大変に興味深く思ってお聞きいたしました。確かに、家を守るという古い、封建的な価値観は低下してきているように思っておりますが、いわゆる、家族と暮らすということの価値をどのように今の若い世代が考えているかに興味があります。

日本では、文化に欧米的な要素が入ってきた結果、個というものが重視される社会になってきていますが、欧米において重要視されるファミリー、家族というものを今後どのように認識をしていくべきなのか、あるいはどういうふうな意識の変遷があるのかという点に注目しています。やはり、今は「家」という概念から「ファミリー」、「ファミリー」からさらに「地域社会」、そういう「つながり」というものが価値観の一つの方向性なのではないかとお話をお聞きしながら感じたところでございまして、ぜひまたこういった分野での御研究なり、成果がありましたらまた御紹介いただければというふうに思っております。

その上で、もう一つ、これは期待をしているところなんです、私どもが高等学校に行っていた40年前ごろは、「自分の生活よりもよくなったほうがいいから都会の大学に行ったほうが良い」と言った親というのは、実はほとんど高校卒業で就職、もしくは中学校卒業で就職された親なのです。現在のいわゆる大学生の親というのは、かなりの率、自分が大学へ行ったという経験を持つての方が増えてきているように思っております。そこにおける意識の変化というものが、あるのではないか。自分が大学に行って成功したと思っらっしゃる方は子どもにも大学行けと言うでしょう。ただ、自分は大学に行ったが、その結果どうだったと

考えているか、その辺の思い、感覚というものが、今後、若者世代に対してどのように影響していくのかということ、ちょっと注目している部分でございます。ある意味、私も子どもが大学に行って、行かせて、その子はまた帰ってきたという。実際大学に行った意味が何かあった、みたいな、そんな世界なんですけども。私はどちらかと言うと、大学に行くなら行ってもいいし、行かなくてもいいというスタンスだったので放任だったんですけども、それが良かったのか悪かったかは別なんですけども。大学行った経験をしてきてる親というのが、子どもの個というものを尊重していくと、最終的に、究極は進学と就職どちらでもいいと考えるのではないかと僕は思っておりまして、そういうような親の意識の変化というもの、少し今後期待したいなと、そのように思っております。

最後、石飛憲さんの御発表でございました。先ほどのお話で、こういったキャリア教育っていうものが地域への愛着という表現でおっしゃったんですが、私はその地域の中でのまた自己実現、これが愛着につながるという趣旨で、大変に重要な事柄ではないかなというふうに思っております。

ただ、ちょっと気になったのが、今日は島根県からの流出、流入というテーマでありましたのであんまり細かく言われなかったんですが、私みたいに市長をやらせていただいていると、市から出る、市から帰るっていう感覚になります。先ほどの、例えば横田高校を卒業された方の中で、卒業後働いています、県内で働いているっていう方、あるいは大学行って帰ってきた十何%、それは島根県内に帰ってきてるといふものの、どこまで地元へ実際に帰ってきていらっしやるか。正直、雲南市の場合でも、地元へっていうのは非常に難しい。そこですごく大きなやはり、大きな、さっきの吉川先生の絵でいいますと、下方圧力がかかっている状態です。

ただ、一方で島根県全体として見たときに、県内に就職する人が増えてます、あるいは確保できました、この構図が中山間地域から松江や出雲といった大きな都市へ単に人口が流出しているだけであるとすると、この構造が続きますと、結局のところ、中山間地域が疲弊をしまして、松江や出雲に送り出す人すらなくなる。結果として、島根県の人口を維持するという構成が取れなくなる。必然的に人口が減っていくという、社会減、社会増が多くなるという、こういう構造。これは、実は島根県対日本という構図は、そのまんま島根県の中の中山間地対都市部という構図に完全に当てはまってまいります。そういった意味で、より、何ていうんですか、先ほどの吉川先生の循環っていうのが、日本国内だけではなくて、そういった細かい部分でも起きていて、その細かい部分を最終的に逆流させる、あるいはそこに誘致、誘導していくということができないと、やはり日本全体の課題解決にはならない。したがって、そうすると、じゃあ、中山間地域でどれだけの受皿をつくって、さらにそこに

向けて皆さんが帰ってこれる環境をつくるか、あるいは帰ろうと思う誘導をしていくか、あるいは、これはIターンは否定されましたが、Iターンであったとしても、そういったところでやはり選んでいただいて、住んでいただく。そういったことを進めていく必要があるのではないかというふうに感じたところでございます。

また、本日はどちらかというに進学校、大学卒業後の人の動きというのが中核であったと思うんですが、やはり、吉川先生あの図にありましたように、メインストリートは、やはり高校を卒業して、そこからの地元で、地域で働いている方っていうものが非常に重要であるというところは私も本当にそう思っております、例えば、雲南市でいいますと三刀屋高校掛合分校というのがあるんですが、そこというのは、本当に皆さんほとんど地元就職と。来るのは結構、県外といいますか県外からの学生もあると。そういった意味で、今後高校というものがどうあるべきなのかというところは、何ていうんですか、特に若い子どもの人口が減ってきて、大学そのものも、本当に大学に行く必要があるのかっていう議論、あるいは大学のキャパシティというのは一体どの程度必要なのかという議論が恐らく日本全国で起こってくると思うんですが、そういう中で、地方の高校、高校というものがどうあるべきなのかっていうのは、これから、何のために、あるいは価値観をどう考えるかっていうような深い議論の中で議論が進むことをぜひ願っております。

大変まとまらない発言でございましたが、このように、ちょっと私の意見とさせていただきます。よろしく願いいたします。

○田中

石飛市長、どうもありがとうございます。では、これからディスカッションに入りたいと思います。

まず、前半にお話くださった皆さんに、今、石飛市長からいただいたコメントに対する御自身のコメント、あるいは前半でお話いただいた内容の補足なども含めていただいて結構ですので、一言ずつお願いします。その後は、そのまま引き続いて吉川先生中心にディスカッションを行っていただきます。

では、吉川先生から前半でお話いただきました順にお願いしたいと思います。

○吉川

石飛市長、コメントありがとうございます。もう今から40年近く前ですよ、私のクラスの自慢の総務委員。もう、成績、幾ら頑張ってもかなわない、しかもスポーツ万能で持久

走を走らせても速いということで、もう正直、何やってもかなわない人だったという関係が石飛さんと私の関係であるわけですがけれども、今日も的確にまとめていただいて、もう私の仕事は全然ないという気持ちであります。非常に目配りの利いたコメントをいただきましてありがとうございます。

私に関するところでは、経済的なものでは測れない心の豊かさというようなこと。人生の成功というのはそこが課題だということと同時に、全体のほかの先生方についても、大卒層の人生を見るというところは分かったんだけど、高卒就職、地元にいるというような人たちへの目配りということで、実際に雲南市での雲南プライドとか、キャリア教育のこととかを御紹介いただいたわけです。考えてみますと、やっぱりいろいろな行政の連携ってということが重要なと思うわけです。国立大学、県立高校、あるいは鳥根県の教育行政というようなところで設計しているもので、頑張っているいろいろやっていますけれども、多分、市長のおっしゃりたいことは、コミュニティや市町村という現場に一番近いところで私たちがうまく目配りしたり、分析できていない鳥根県を動かす基幹の部分というのをサポートしているということだったかなというふうに理解しました。そういうことから言いますと、やっぱり自治体間の連携あるいは組織間の連携ってものを密にして、本当に、私たちの鳥根県の若い人たちを、受渡しをしっかりとしながら、しかも手厚くサポートしながら、なけなしの若い世代であるわけですから、やっていこうということかなというふうに私は受け止めました。ありがとうございました。

○石田

石飛市長、非常に的確な意見をありがとうございました。ちょっといただいた意見を聞きながらすごい冷や汗が出そうな感じになってしまいましたけれども、ちょっとまとめまして、コメントをさせていただきます。

まず、エッセンシャルワーカーについて、県内に進学するってところが、ちょっとどうしても腑に落ちないというところはお話をいただきました。こちらなんですけれども、確かにデータとしてはそのようになっています。このことについては、私は、エッセンシャルワーカーというのですと、例えば、学校の先生、それから医療従事者の方々なんですけれども、こちらは、まず鳥根県などで働きたいと、そういう医療関係で働きたいと考えたときに、じゃあ、まず何が必要かということになると、資格なんです。そうなってくると、別にどこの大学に行っても、例えば、東京大学に行っても鳥根大学に行っても、看護を学べば看護師の資格が手に入れることができると思います。そうなりますと、やはり県外に進学して、それで、

最終的に県内で就職しようと考えているのであれば、県内に残る、残るのであれば、別に外に出る必要はないから、県内に進学しようかなと考える人が多いのかなという理由で、やはり県内に残る人は、残る傾向があるのかなと考えています。

それから、雲南市のほうで大きな企業の誘致に成功されていて、非常に製造業などで雇用をつくられているという話は伺っています。それで、やはり、受皿が増やせない、多様な職業という意味では、確かに島根県と東京、大阪などを比べると、どうしても島根県、見劣りするというのは事実かなと思います。ただ、私ちょっと、詳しく言っていなかったんですけども、受皿というのは、実際にある受皿なんではなくて、若者がそこにあると認識できる受皿のことを指しています。それで、私は、本当は、あったとしてもそこに目を向けてくれない若者がいるということが問題の最も重要なところだと思います。そしてそれはよりいい大学、よりいい進学先というのを求めるというのはもちろんありますし、それから、どこの大学に行くのかという進路指導というのが行われているというところからつながっているのかなと思います。

それで、これ、すみません、私の私見というか、私の親がよく言っていることなんですけども、県外の大学に行ったら潰しが利くし、県内にはいつでも戻ってこられるけど、県内にいたら県内でずっとそういう生活するしかないよ、それでもいいのっていうふうによく言われるんですよ。あるいは、せっかく県外に行ったのに帰ってこないっていうのは、吉川先生が最初におっしゃったように、何となく県内に帰ってくるのに引け目があるというような感じで、どうしてもそういう理由で、県内にそもそも目を向けさせないっていうところが1つあると思います。なので、まずは県内で居場所、県内で職業を見つけさせるっていうところで、その受皿というのを認識させるっていうのが大事なかなと思います。

そういうところで、雲南市の取組で雇用を確保するっていうのは第1段階で、そういうところを高校生、卒業するまでに認識させるということが大事なのではないのでしょうか。石飛先生が、高大連携、あんまり効果が見られないとおっしゃっていましたが、大学じゃなくて、その地域の産業などと連携をする。例えば、ほかの県でいいますと高校生インターンシップを、大学に進学する生徒にもやってるといふことがあるんですよ。そういうので、職業を見つける、職業につなげるというところで、やはり連携をしていくというところが必要なかなと私は思います。ですので、受皿を増やすというのはもちろん大事なんですけども、それ以上に若者にそれを認識してもらい、社会としてそっちに意識を向けてもらい、そういうふうに変えていくのが重要なかなと思います。以上です。どうもありがとうございました。

○片岡

石飛市長、的確なコメントありがとうございます。まさに私自身も、家族と暮らすことの価値、それから地域に、地元に残ることの価値、ここのところがやっぱり大きなポイントだと思っています。

私は、今年度は邑南町で調査をやっているのですが、高校生へのインタビューで親がどんなことを言ってるかって聞いたら、好きなようにしなさいとは言ってくれるのだけれども、経済的に大変だからできれば地元とか、そういうことも言われてるって言う生徒も何人かいて、結局、何ていうんですか、地元に残るとい、地元につきける要因とは、お金の問題とか、何かあまり積極的な理由じゃない。先ほどの、私が前半部分で強調したような「広い世界での学び」みたいな、「子どものために」というポジティブな意味じゃなくて、お金がないからとかそういうところで、「できるだけ考えてね」みたいな、消極的理由で引き止めるっていう形になってるんだっていうようなことをインタビューから見いだしていたところですよ。

高校生にはアンケート調査もしてまして、アンケート調査といっても自由記述のアンケートなんですけど、そこで地元に残ることについてどう思うか自由に書いてくださいって言うと、「過疎高齢化している地域にとっては大事だ」とか「地域活性化のために必要だ」とか、人のためなんですよ。自分のためではない。自分の夢を達成するためとかではなく、地域がこのままだったら大変だからとか言う。何という優しい子たちなんだろう、地域の、地元のことのためにそんなに思ってるのって感心するんですが、でも、言い換えれば、自分のために残るっていう、そういう価値観っていうのがまだできてないのかなって思いました。つまり、何ていうのか、さっき自己実現という言葉が出てきましたけど、そういう自己実現のために地元にいるっていう、そういうストーリーがない。ここに残ることは、親の経済的な、そういうところに配慮してだとか、仕方がないからとか、あるいは、地元がこのままいくと若い人がいなくて大変になるからとか、そんなふうな語りしかできないのかと思うと、そこが若年層流出をなかなか止められない理由の1つなのかなと感じます。

一方、高校生に、インタビューの中で高校時代何が一番楽しかったか聞いたら、自分の撮った写真が学校のホームページに載ったこととか、あと、農業鑑定競技かな、何かそういう競技大会で表彰されたこととか、褒められることなんですよ。承認されるというか、そういう経験が地元にいる間にどれだけできるのかってところが鍵をにぎるのかなっていうことも考えています。ありがとうございます。

○石飛（憲）

石飛市長、非常に的確な御指摘いただいて、私がおう少し話したいなと思うところが出てきました。私も石飛市長と同じ雲南市掛合町出身で、小学校、中学校の3つ上の先輩ということで、よく知っています。まさにそこに住んでいる人間として、1つ目は、中山間地域から松江、出雲地域への流出という問題があります。実は、奥出雲町も雲南市も同じで、これは非常に大きな問題で、実はそこの部分が大事と思いながら、今日はテーマが県外流出ということでしたのでそこに絞ってお話した部分があります。奥出雲町も、やはり同じように、先ほどのデータ見ていただいた黒字で少し示しておきましたが、やはりなかなか町内にとどまらないという状況があります。それをどうUターンさせるのか、とどませるのかというところは大きな課題です。これは県外流出とはまた別に考えていく課題であると考えております。そこで大事なのは、やはり、奥出雲町あるいは雲南市がその地域の学校と一緒にどういった学校づくりをしていくかということになってくると思います。

もう1点御指摘いただいたキャリア教育の自己実現という部分です。これは非常に大事なところで、我々が教育に携わるとき、実際これをどうしていくのかということが一番大事なところです。地域課題を解決したり地域と一緒に交流したりしていく中で、これを達成させられるように我々はしていかないといけません。やはり地元に残ろうとか、先ほど片岡先生がおっしゃった、地元で自分の生きがいを見つけて頑張ろうというような気持ちにはなかなかならないというのが実際だと思えます。

我々としては気をつけていかなければならないのは、地域と連携して教育活動をしていく中で、場合によっては逆効果になることがあるんです。奥出雲町の総合計画を生徒に見せると、「えっ、こんなに人口が減るんだ」と生徒は言うんですね。そうすると、ここに住んでいられないと思う生徒もいるはずなんです。そうではなくて、そういったものを見ながらも、やはり地元で生きがいがあると感じられないと、地域に戻ってこようとか、ここで暮らそうとか、とはならないのではないかと思います。

もう1点補足しますと、データの中で「この地域で働きたいと思えますか」という質問がありました。はたして生徒は「この地域」をどこと捉えているのか。島根県と捉えているのか、奥出雲町と捉えているのかでかなり意味が違うのではないかと思います。そこの辺りも気をつけながら今後見ていく必要があると思っています。以上です。ありがとうございました。

○吉川

ありがとうございました。今日の4人の発表っていうのは、高校生を対象としたデータ、そして、片岡先生の保護者の視点。そして、石飛先生からは高校という学校の視点ということで、市長からは自治体市町村の首長としての立場から見えていることということをお話しいただいているわけですが、それぞれの立場から見たときに、相互にここは確認したい、大事なものは、多分、連携をうまくできてるかとか、同床異夢の状態になっているんじゃないかっていう点だと思うんですけども、どなたか相互の報告者に質問、意見っていうのがありますか。片岡先生、どうですか。

○片岡

じゃあ、私から。石田さんの調査結果もそうですし、それから石飛先生の報告でも、女子生徒と男子生徒の違いが出ていましたね。石田さんの報告では、エッセンシャルワーカーの職が男子と競合するから、女子が県外に出てしまうという話がありましたし、石飛先生の報告でも、県外に出ていくのは女子生徒のほうが多いっていう話が出てきたんですけど、何でそうなるのかっていうのが気になります。どうして、競合したら、女子のほうが遠慮するんですかね。もし調査データで何か分かっていることがあったら教えていただきたいと思うのですが。

○石田

ありがとうございます。女子のほうが県外流出しやすいっていう、そうです、僕のところだと確かに、詳しく言うと、男子では地方公務員志望していると、そうでない男子生徒よりも県内進学しやすい。女子だと、そうでない人と同じぐらいにしかならないというところにまずなります。ところが、福井県のデータを見てみると、これが逆になるんですよ。福井県だと、まず、男子は同じぐらいにしか県内に進学しない。外に出ても職が得られるからかもしれないんですけども。女子は県内に進学して、それでそのまま公務員になりたいって思ってる子はそのまま進学するっていう形になっています。

それで、この両県の差、典型的な地方の県、それから、そうでない島根県というので比べてみたときに、やはり、そもそも男性のほうが県内で職を得やすいっていうのがまず職業一般的にあって、女性のほうが非大都市圏よりも都市圏に選択的に移動しやすいっていうのはあるんです。県外の、都市部のほうが条件に合致したところに見つけやすいという実態があります。それが、同じようなことが地方公務員でも起こっているということは、つまり、そ

の求めている条件に合ったものは県内にあるはずなのに、男性はそこに行こうとして、女性だと県内に進学できずに外に出てしまうっていうのがあるとすると、エッセンシャルワーカーではない職業と同じような女性に対する不利があるんじゃないかと私は考えました。

○片岡

ありがとうございます。

○石飛（憲）

詳しく分からない部分もありますが、1つには、就職する生徒についてみると、奥出雲町の町内就職、あるいは雲南市辺りで就職するという生徒ですが、ほとんど男子です。というのは、奥出雲町内は製造業が多いですし、女子生徒が就職したいと思うような企業がなかなかないというのが大きな1つの原因かと思います。先ほど、石田さん申されたように、どうしても県外の専門学校等でそういった自分の憧れの職業に向かって出ていくというところが大きいのではないかと思います。

○片岡

ありがとうございます。

○吉川

ありがとうございます。

一般的に言って、首都圏には若年の高学歴の女性が多く、大卒男性は少ないということがあります。これは、石田龍之介さんが言ったようなことが全国の県で起こっているとそうなるわけですが、ここでちょっと市長に聞いてみたいんですけども、今、石飛先生のほうから、奥出雲に残るのは男子だということがあったわけですけど、やはり、言い方は難しいんですけども、人口自然増ということで、たくさん子供が生まれて、合計特殊出生率が上がっていくということを県が目標とするならば、その男女の人生の流れをうまく調整すること、そしてそのマッチングというようなことがあると思うんですけども、雲南市のほうでは現状と課題、何かありますか。

○石飛雲南市長

先ほど、石飛憲さんがおっしゃったように、ポイントは事務系の職場。女性が働く場所っていろいろです。例えば、美容室、あるいはスーパー、いろんなことがあるんですけども、一定の学歴を有する方が望む職場というのは、いわゆる事務系の職場でございます。公務員もその1つである。そういった事務系職場っていうものをいかに確保するかということが非常に重要なんですが、皆さん考えていただいたら分かるように、事務系職場っていうと大体、企業の本社。あるいは、何ていうんでしょうね、研究所と、あるいは、民間でいいますとですね。なかなか民間での事務系職場っていうものをこの地方で確保するっていうことは非常に難しいっていうことは確かです。

ただ、先日、バントというIT系の企業さんと企業の立地の協定を結んだんですけども、この雲南市内でそういう事務系の職場、いわゆる、インターネット系の広告の企業さんなんですけども、そういったところで、今回雇用を、雲南市内で、特に女性の事務系の雇用を生み出していただけるというようなこともございます。そういった意味で、今、必ずしもテレワークなどもある中で、そういった事務系の職場が首都圏になればならない、都会になればならないという時代でもなくなってきております。そうした意味では、ある程度そういった受皿となる、先ほどの受皿となるような職場の確保というのは、しっかり行政としてはやっていかなきゃいけない、そういう分野じゃないかなと思っております。

○吉川

ありがとうございました。

結局、都市での若年層の未婚化、晩婚化っていうのと、地方での若年層の未婚化、晩婚化っていうのが、流出のバランスの悪さと受皿の問題ということで発生しているということなんです。当たり前のことですが、生まれてくる子どもたち、18歳までの子どもたち、男性、女性、フィフティー・フィフティーであるわけです。それなのに、そういう流れの不整合が起こるというところにも、やはりその流出を巡る問題・課題っていうのがあるのかなと思うんですけど。

片岡先生、親から見たときに、男の子と女の子っていうのは、流出について何か違うところがあるもんなんですか。

○片岡

親に対してはインタビュー調査だけでなくアンケート調査もやってみたんですが、あんま

り子どもの性別の違いは出なかったです。ただ、1つ特徴的だったのは、女子の親ですね、女子高校生を持っている親の回答でちょっと目立っていたのは、資格を取らせたいということ。安定した職業に就くためには、資格を取ることが重要だという、そういう項目に対して、肯定する反応が多かったのです。それぐらいで、あとはあんまり男女差が見られないのはちょっと意外に感じました。

ただ、県外の大学に進学すべきだっていう親は、やっぱりどちらかと言うと男子の親のほうが多くて、その辺は先ほどから出ている結果とつながってくるのかなとは思っています。

○吉川

ありがとうございます。

石飛憲先生にも聞いてみたいんですけども、進学する人たち、専門学校も含めてですが、この人たちの、男子と女子では行きたい地域が、分野ではなくて、行きたい地域が違うというようなことが傾向として、例えば、どちらのほう県内に残りやすく、どちらのほう都市部を志向しやすいみたいな、そういう傾向があるもんなんですか。

○石飛（憲）

そうですね。今までの経験の中で、指導した中では、やはり女子生徒については近くにとこのような傾向はありますが、大きなものはないと感じています。中国地域、あるいは関西ぐらいでというのが女子生徒はあって、男子ですと遠くでもいいよというような傾向はあります。県内にいてほしいという親もいなくはないです、女子生徒の場合。そういう傾向はあります。ただ、それほど顕著かといわれると、最近だんだん薄れてきたという感じがします。

○吉川

私の理解しているところでは、福井県には仁愛女子短大というものがベースになった仁愛大学というところがあるんですね、県内の私立大学です。男女比を見ますと圧倒的に女子比率が高く、女子の収容力が高いということがあります。これは、石田さんの言っていたところにも通じるかなと思ひまして、つまり、進路未定で事務職志望というような人が、例えば、雲南市であるとか奥出雲町にいた場合に、それを、松江でとどめることができるのか、県境を越えて行ってしまふのかっていうところ。それは、若年を収容する受皿としての高等教育機関のポイントかなというふうには思ってるんですけども。島大って、男女比とかどうなんですかね。

○片岡

そうですね。やっぱり文系の領域に女子が多いっていう傾向は今もあると思うんです。それなのに今、島根大学は、定員削減とかいう話もあるうえに理系の新しい学部をつくるということも発表しました。このことが今後、もしかしたら女子がまたまた県外に出ていく、そういう契機になってしまうんじゃないかな、とも思っています。

○吉川

ありがとうございます。

同じ家族っていう観点で石飛市長から出てきたのは、親がどういう人かっていうのが時代によって変わってきたっていうことが出てきたんですね。これ、大卒再生産とって、大卒層の子どもがまた大卒になるということとも関係してきます。私が住んでるような大阪とか東京では、もうこれが当たり前になっているのです。キャンパス内でも、お父さん、お母さんが大卒である人のほうが、非大卒の両親から初めて大卒になったという人たちよりも数が多くなってるというのが日本全体の実情であるわけです。この親の学歴と親の希望っていう在り方っていうのが、石田さんが見た7校と、石飛憲さんが見られている横田高校では違うのかなと思います。親の学歴による人生設計と異なり、私は学歴分断というふうに言うわけですけど、そういうようなことがあるのかなというふうに思いました。これはタブー視されがちなことであるわけですが、やっぱり市長はよく見ておられて、親御さんのお気持ちというのを考えておられるということだと思うんです。やはり、そういう雲南市、奥出雲町からも大卒人材をどんどん輩出していったほうがいいというふうに思われてますか。

○石飛雲南市長

先ほどのお話のとおり、大卒でなければ、例えば雲南市で働けないという場所は非常に限られているというふうに思っております。ただ、日本全体の発展を考えると、それは、当然地域としてもそれに対して協力していかざるを得ないと思っております。そういった意味で、大学に行くことが必要だ、そういう子どもはやっぱり行くべきだと。ただ、何となくモラトリアムのために、あるいは、将来に必ずしも寄与しない、そういった投資をすることはあまり望ましいことではないんじゃないかな、そういうふうに思っております。これは、先ほど申した、何のために行くのか、行かなければならないのか、そここのところの少し考えは、これからもよく考えなきゃいけないんじゃないかなというふうに思ってます。

○吉川

ありがとうございます。

ところで、自己紹介がありましたとおり、ここにいる5人を整理しますと、石飛市長がUターン組なんですよ。私と、恐らく石田龍之介さんが都市流出してしまった、県の関係人口であるわけです。そして、片岡先生がIターンで、石飛憲先生が県内で、私は、県立高校の教諭が、この県で純粹培養というか、本当にサラブレッドのように育てているという、もう本当に、生徒さんたちに見てもらいたい例なのではないかなというふうに思うんです。中山間地域からの大学進学、そして、県内の大学への進学ということについて、御自身のライフコース等も見られて、どのように、何かお考えとかありますか、こうすればいいとか、この辺りに課題があるという点は。

○石飛（憲）

難しい質問ですね。私は島根大学の教育学部で教員を志しましたので、最初からそこにとのことです。もちろん、県外に出たいという気持ちが当時ありました、正直。ですが、やはり今日の話でありました学力の面とかいろいろな面で地元に残ったというところがあります。これから先なんですけども、私も、今、中学生以下に子どもが数名おりますので、今後、高校卒業するときに地元で進学させるかどうかということは実際に悩むところなんです。外に出るような力があれば、やはり送り出していく、行きたいといえば出すべきなのか、いや、地元で頑張れるのだから、地元でしっかり、島根大学に行けるなら島根大学で、外の大学出られるのでも島根大学でしっかり力をつけて、地元で、地域で生きていくというのも1つの選択肢でしょう。

少し話がそれましたが、地域で育って、地域で働くという人が、みんなではないですけど、そういう人がやはり出てきてほしいと思っています。自分は力があるんだけど、東京大学に行くのではなくて島根大学で頑張るといような子どもたちが出てくるようなことがこれから必要だと感じています。それで、自己実現ができて人生が幸せであるならば、そのことが大事なのではないかと感じています。

○吉川

私ごとになりますけれども、私のところにもやっぱり10代の子どもがいるんです。大阪の北摂地域なんですけど、この場合は中卒、高校中退、専門学校、短大、四大、四大もいろんなレベルの、A、B、C、D、E、Fなんて言ったりしますけど、京都、大阪大学から

私立大学っていうのが、全部通学圏内でそろってるんですね。だから、うちの娘たちは、進路と地域の移動っていうのを全く考えないんです。片岡先生も、多分10代の頃そうであったと思います。

ところが、この県では、18歳の時点で何になるか分からないっていうその状況で、決定的なルートを選ばせてしまうという、選ばざるを得なくなってる。これが、やはり都会と島根県の一番大きな違いであるのかなというふうに思います。

一番若い石田さんなんですけど、データのところを離れて、進路、自分の同年代の人の進路というようなことで、島根県について何か一言ありますか、なければいけないでもいいんですけども。

○石田

ちょっと難しいですね、一言。同年代の……。

○吉川

急に振られても難しいかもしれないですね。石田さんのような人がいるからこそ、もうこれ、島根の誇りというふうに言ってもいいと思うんですけども、日本全国が前へ進んでいくことができるのだと思っています。これは市長もおっしゃいましたけども、石田さんだけでなく、その同年の24歳、25歳っていう人たちみんながこの先の島根県を支えていくと。この県に生まれた以上、この県の県民としてやるべきことっていうのがあるのかなっていうふうに思いました。

最後に、何か一言という方がありますか。

お願いします、石飛市長。

○石飛雲南市長

すみません、どうしてもちょっと申し上げたかったの。先ほど、片岡先生のコメントの中で、子どもがなぜアンケートの中で地域に生きたいかっていったときに、地域のためになる、地域のためにしたい、自分のためではないっていう、ちょっと、御発言があつて、僕はここにすごく実は違和感を思っておるんです。

といいますのが、これから、人生の豊かさを求めていきましょう、心の豊かさを求めていきましょうといったときに、果たして自分のためだけに物事を過ごして、本当に人生って豊かなんだろうかという、この問題提起です。なおかつ、これは私の個人の思いもあるんです

けれども、人のために何かをしてあげることが、最も自分のためになるんだというふうな物の考え方、そういったものが、実は地域社会においてこの社会を形成しているということの自分の満足感につながる。ですから、僕はあながち、高校生が地域のために頑張りたいと、それを1つの目標に、いろんな自分の人生の選択をしていただくというのはむしろ歓迎すべき事象であって、何ていうんですかな、それを疑問視するというか、そういうのはいかがなものかなという、ちょっと思いがあってお聞きさせていただいたとこです。

○片岡

そのとおりだと思います。そういうふうになっていくのが私も理想的だと思いますし、何か、自分のために、私が、私がっていう、そういう時代が結局こうした学歴社会をつくるんだと思います。何々大学に行って偉そうにするっていう、そういうものからもう早く脱却しないといけないと思います。そういう意味では、「地域のために、人のために」っていうことにもっと大人たち、親たちも価値を見いだし、そして、子どもたちもそれをもっと主体的に選べるような、そういう社会をつかっていくっていうことには私も賛成ですし、そうしていかないといけないと思います。ありがとうございました。

○田中

皆さん、どうもありがとうございました。

では、間もなく閉会といたしますが、最後に主催者を代表いたしまして、島根大学法文学部山陰研究センター長を兼任しております丸橋充拓法文学部長より御挨拶を申し上げます。

丸橋センター長、お願いします。

○丸橋（島根大学法文学部長・山陰研究センター長）

失礼いたします。本日の企画を主催いたしました島根大学法文学部山陰研究センター長を務めております、島根大法文学部長の丸橋と申します。

本日は、皆様、お忙しい中、また新型コロナウイルス感染症の深刻な状況の中こちらまでおいでいただきまして、貴重なお話たくさん伺いましたことを心よりお礼申し上げます。また、オンラインでの視聴という形になってしまいましたけれども、この企画を視聴していただいた皆様にもお礼申し上げたいと思います。

本日の企画は、山陰研究センターといたしまして、現在、様々な研究プロジェクトを進めておりますけれども、片岡先生の主催されているプロジェクトの1つの成果という形で、地

域の皆さんと共有できればということで、持たせていただきました。これがきっかけになって、少しでも地域の皆様との交流、そして地域課題に対する取組が深まるきっかけになればと考えております。

私自身も県外からのＩターン組、片岡先生と同じですし、また、子育てもまだ現在進行形でやっているという中で、私自身も自分とは全く違う、場所も違うし時代も違う、そういう中で、全く違う状況で、今、地域あるいは若者の問題が進んでいるんだなということを日々痛感しておりますので、今日の話は、本当に私自身もたくさんヒントをいただいたなと思っています。

特に印象的だったのは、若者のことが問題ではあったんですけども、それぞれのコメントの中から大人サイド、あるいは社会のほうの意識の在り方、ここがやっぱり大事であって、それが親であれば子どもにも伝わるし、雇用者のほうであれば若者の生活を受け止める存在であるということ、あるいは石飛先生の大人が諦めないというようなお言葉も非常に印象的でありましたけれども、20世紀型の価値観が通用しなくなる中で、これは手探りではありますけれども、我々のような人文社会科学系の学問に携わるもの、そして、地域の中で負託を受けているセンターというものがこれからますます役割を担わなければいけないことも改めて認識させていただきました。

私個人としても、またセンターといたしましても、様々な示唆をいただけた企画になったかと思います。心よりお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

○田中

ありがとうございました。

本日は、「持続可能な地域社会をめざして」というテーマで議論をしてまいりました。このことが私たち住民一人一人にとって直接大きく関わる問題であるということを受け止め、そして、どのような価値観をこれから育んでいくのか。また、それをどう実践していくのかということ将来に向けて考えていくことが必要でしょう。それには、教育や行政、それに大学の学術が手を携えて、そこに住民が参加しながら議論を続けていくということが必要であるように思われます。

これにて閉会といたします。御登壇くださった皆様、最後まで熱い議論をしてくださり、誠にありがとうございました。

そして、御参加くださった皆様、長時間にわたりどうもありがとうございました。